

知的障害特別支援学校幼稚部のオンライン集まり活動の取組

ー新型コロナウイルス感染症対策下の学びの継続と保護者支援に関する考察ー

○井上剛*小泉浩一*田口悦津子*大伴潔**橋本創一**
（*東京学芸大学附属特別支援学校、**東京学芸大学）
KEYWORDS：知的障害・ICT・保護者支援

【はじめに】

東京学芸大学附属特別支援学校（以下、対象校）は、埼玉県との県境に立地しており、学区域は東京都～埼玉県を含み、知的障害のある幼児・児童・生徒が在籍している。

対象校は、新型コロナウイルス感染症による臨時休業要請を受け、2020 年 3 月 2 日～5 月 31 日まで休校措置をとった。6 月 1 日以降は分散登校や時差通学、その他の感染症対策を講じながら安全な学校生活を維持している。

対象校では、在校生保護者を対象とした「休校期間中の生活」（4 月 30 日～5 月 8 日の休校期間中に実施）「各家庭のインターネット環境・オンライン授業等への意識調査」（6 月 1 日～12 日に実施）の両調査を実施した。本調査からは子供・保護者共にストレスを感じていること、長期休校中にオンライン授業を、その活動内容として「朝の会・ホームルーム」を求める声が多く示された。また、休校期間中に取り組んできた保護者への電話相談においても、保護者の不安が多く聞かれた。その中で、年長幼児保護者から「友達の顔が見たい」という願いが提案された。

そこで本稿では、新型コロナウイルス感染症の影響により不安を感じていた保護者への支援の一環で行った幼稚部オンライン集まり活動について報告する。新型コロナウイルス感染症対策や学びを止めないための様々な報告は、文部科学省や国立特別支援教育総合研究所他がインターネットを通じて発信している。また、国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センターでは、発達障害者とその家族への影響を調査報告している。一方で、知的障害のある幼児を対象とした実践報告が少ないことから、保護者支援に関する観点のみでなく幼児の活動への参加状況の観点からも考察することを目的とする。

【方法】

1. 対象：

2020 年度の対象校幼稚部在籍年長幼児（3 名）とその保護者（3 名）を対象とした。幼児の特徴は表 1 の通りであった。

表 1 対象幼児のプロフィール

A 児	男	2：0 8	ASD, 集団参加苦手, 言葉でやり取り
B 児	男	2：0 4	DS, 言語不明瞭, 言葉でやり取り
C 児	女	2：0 2	DS, 要求挨拶等簡単な言葉でやり取り

*発達年齢は新版 K 式発達検査

2. 実践手続きと評価方法：

2020 年 5 月（休校期間）～7 月中旬に週 1 回 30 分、オンライン会議アプリ Zoom で、2020 年 7 月中旬～2021 年 2 月に週 1 回 30 分、Microsoft Teams で、計 17 回オンライン集まり活動を実施した。事前の活動内容へのリクエストおよび事後評価を保護者との間でメールや連絡帳（休校期間以外）により毎回実施した。なお、オンライン集まり活動は対象校教育課程にある「朝の集まり」のねらいと活動をオンライン上の活動として考案したものである。幼児の活動はパソコン画面を録画することで記録し、表 2 の観点により評価した。

表 2 オンライン集まり活動のねらいと評価の観点

ねらい	小集団参加、コミュニケーションスキル獲得
プログラム	オンライン上の評価の観点
①はじまりのうた	教員の手遊び歌の模倣。
②日付・天気発表	教員が提示した天気カード（2 枚）からその日の天気を選択。画面上の選択肢への反応。
③出席確認	教員の呼名（同時に幼児の顔写真提示）への反応。
④あいさつのうた	教員の手遊び歌の模倣。 手遊び歌での教員による呼名・画面上のハイタッチへの反応。
⑤遊びのリクエスト	教員が提示した遊びカード（3 枚）から好きなカードを選択。画面上の選択肢への反応。画面上の活動への注目・反応。

3. 倫理的配慮：

初回時に研究の趣旨を説明し、匿名性が保たれること、得られた情報が研究目的以外で使われないことを保護者に説明し同意を得た。

【結果と考察】

1. 保護者による評価および保護者支援

保護者の評価等の主なものを表 3 にまとめた。

表 3 保護者による評価

保護者 A	絵本に注目。レパートリーを増やしてほしい。 踊れるダンスがあるとストレス発散になる。 兄弟そろってダンスして盛り上がった。
保護者 B	画面に先生や友達映っていると集中しにくい。 絵本が大画面（画面共有）になると集中した。
保護者 C	提示される選択肢が画面に入っていない。 絵本も見やすく楽しかった。 ダンスをして「お母さん、楽しかった」と感想。 今回は「*絵本のタイトル」をリクエスト。

この他、保護者からは「時間が許せばもっとやりたい」「このまま続けてもらいたい」等、総じて良好な評価が示された。一方で、オンライン活動に参加できない保護者がいたり、ピン留め機能の伝達、保護者と教員の見ている画面が異なることからモニタリングの必要性が判明したりする等、教員・保護者が共に取組を続けながら幼児の活動を支えていった。

以上、幼児のオンライン活動の取組には、全面的に保護者の協力が必要であるが、保護者の意見やニーズに即時的に対応することで、一緒に活動を支えていく姿勢はコロナ禍において保護者支援になり得たのではないかと考える。

2. 幼児のオンライン集まり活動への参加

幼児のオンライン上の評価（表 2）に関して、結果を表 4 にまとめた。なお、小集団への参加が苦手だった A 児を含め、活動への参加は良好だった。

表 4 幼児のオンライン上の活動評価

プログラム	オンライン上の活動評価
①はじまりのうた	3 名共に模倣した。
②日付・天気	A, B 児は指さしと言葉で選択した。 C 児は指さしで選択した。
③出席確認	3 名共に挙手と言葉（「はい」）で返答した。
④あいさつのうた	3 名共には呼名に反応しハイタッチできた。 C 児は他児への呼名に反応することがあった。
⑤リクエスト	A, B 児は指さしと言葉で選択した。 C 児は指さしと時々言葉で選択した。 手遊び、ダンスを模倣した。 パネルシアター、絵本に注目した。

対象児は「朝の集まり」を対象校で経験していたことから、オンライン上の各プログラムに対応できたことが予測される。今回は割愛したが休校期間中、「朝の集まり」の経験が皆無だった年中幼児（2 名）の反応は、実態にもよるが、期待したものではなかった。C 児は画面上の選択肢を指さしで選択したが（保護者情報）、言語が少なく不明瞭なため教員には伝わりにくく保護者の支援を要した。指さしによる選択行動が獲得されていなければ、本活動への主体的な参加を工夫する必要がある。パネルシアター、絵本はオンラインの方が対象児の画面への注目は高かった。教材をスキャンしてアニメーション化する等加工し、オンライン会議アプリの画面共有機能を用いたため、デジタルネイティブ世代には受け入れやすかったことが予測される。また、対象校では夏季休暇等の長期休み期間、タブレット端末に教員の作成した手遊びや絵本読み聞かせ等の動画コンテンツを導入し、貸出してきたことも要因と考えられる。

（INOUE Gou, KOIZUMI Kouichi, TAGUCHI Etsuko, OTOMO Kiyoshi, HASHIMOTO Souichi）